

春 告 草

第 76 号 平成 29 年 10 月 4 日 進路指導部発行

センター対策、ここがツボ

平成30年度センター試験出願が明後日、締め切られる。今年度は約57万6千人の出願があり、現役生の志願率は約45%で年々増加の一途である。私大のセンター利用入試もあり、私立大学全体の約8割がセンター利用を実施している状況だから、志願者増加は当然の結果だろう。本校6年生の出願率がほぼ100%であることは、前号で伝えた通りである。

センター試験は教科書レベルの内容で、難問はないので対策は立てやすいと言われている。実力のある人にとっては（特に英数は）簡単なものを感じられるだろう。しかし、逆に実力がまだ伸ばし切れていない人やこれから準備を始める5年生、4年生にとっては、5教科7科目、6教科8科目という圧倒的な量の前に立ちすくみ、遂には「進路変更」という甘〜い方向へ舵を切ってしまうことが心配される。センター試験まで明日で丁度100日前となった状況で、6年生にとって、今更「ツボ」と言われても…というところもあるかも知れないが、一応の知識は授けておきたい。また、5年生は先週、科目選択説明会があったが、締切りまでにしっかりと考えて選択科目を決めてもらいたい。今年度の統計を元に解説するが、大学毎に行われる個別試験には触れない。選択科目を決めてみたものの、入試には使えない科目だったなんてことにはならないよう、資料や大学のホームページでとことん調べることだ。

あと100日で何点伸ばせるか？

センター対策のツボというのは、本試験までにどれだけ時間がかけられるかにある。どの組み合わせでいけば効率的に受験勉強がはかどるか、本試験でどれだけ有利に得点が積み上げられるか、科目選択の妙がモノをいう。例えば英数対策で時間がかかってしまうのであれば、理社はできるだけ対策に時間をかけなくても点が取れる科目の方が有利だろうし、難関大志望ならば、得点差の出やすい科目で高得点を狙いたくなる。かけられる時間が少ないのなら地学・生物・政経、高得点を狙うのなら物理・世界史という選択を思いつく人もいることだろう。表1に今年度の科目別の受験者数と平均点を示した。受験者数の少ない科目は省略したが、参考にしてもらいたい。

内容的なことに触れると、数学に関しては基本的に素直な問題が多く、新課程入試になり3年が経過しているので、出題傾向はほぼ固まっている。オーソドックスな問題はひととおり解法を覚えておくことが必要だろう。

英語はこのところ長文化しているから、難易度の低いところから始めて、とにかく少しでも多く読みこなしていく。またリスニング重視の傾向が強まっているので、その対策の音声教材を活用して慣れておくことも必要だ。

直前期は理社科目に集中して取り組みことも大切だろう。英数に比べて直前期まで力を伸ばすことが、ある程度可能だ。また、英数に比べて意外にグンと伸びるのが現代文だ。今年

表 1. 平成29年度センター試験平均点等一覧

教科名	科目名	受験者数	平均点
国 語(200)	国語	519,129	106.96
地 理 歴 史 (100)	世界史 B	87,564	65.44
	日本史 B	167,514	59.29
	地理 B	150,723	62.34
公 民 (100)	現代社会	76,490	57.41
	倫理	22,022	54.66
	政治・経済	54,243	63.01
	倫理・政経	50,486	66.63
数学①(100)	数学Ⅰ 数学 A	394,557	61.12
数学②(100)	数学Ⅱ 数学 B	353,836	52.07
理 科 ① (50)	物理基礎	19,406	29.69
	化学基礎	109,795	28.59
	生物基礎	136,170	39.47
	地学基礎	47,506	32.50
理 科 ② (100)	物理	156,719	62.88
	化学	209,400	51.94
	生物	74,676	68.97
	地学	1,660	53.77
外 国 語 (200+50)	英語	540,029	123.73
	リスニング	532,627	28.11

は国語全体で平均点が大幅ダウン(−22.4点)したが、センター現代文では、客観的な答えを求める問題が多いので解き易いのだという。古文・漢文はレベル的に易しく、対策本を1冊やるだけでかなり点が稼げるということだ。

次に地歴・公民や理科の選択について解説する。これは勿論、5年生、4年生向けの話であるが、受験生も知っていて損はないだろう。尚、記事は春告草50号、51号(平成29年2月発行)のものを再編集したものである。

地歴・公民は何を選択するか

地歴・公民を何で受験するかを考える際は、**4単位科目**(世界史B、日本史B、地理B、『倫理、政治・経済』)と**2単位科目**(世界史A、日本史A、地理A、現代社会、倫理、政治・経済)の2つに大きく分けてみる必要がある。国公立大文系を受験する場合、地歴・公民は2科目受験する必要がある。基本パターンは「日本史B」と「現代社会」で受験するなど、4単位科目と2単位科目を合わせた10科目から2科目の組み合わせだ(表2参照)。しかし、東京大、京都大、一橋大など難関大は**4単位科目から2科目を課すのが標準**である。さらに世界史A、日本史A、地理Aが選択できないケースや、他教科と合わせて2〜3科目を選択させるなど、科目指定にはいろいろなパターンがある。

国公立大理系志望の場合は、一般的には2単位科目を含む10科目から1科目を課すところが多いが、難関大は4単位科目を指定するところもあって、大学により様々だ。平成29年度における科目指定の例を50号に掲載してあるので、バックナンバーを参考にしてもらいたい。(本校ホームページからダウンロード可。)

では何を選択すれば「有利」か、ということになるが、併願する私大の科目指定も考慮しなければいけないので、単純に平均点の高い、低いだけを見て決定するわけにはいかない。しかし、得点分布状況などは知っていた方が、対策も立てやすいだろう。下図は今年のセンター試験における4単位科目の得点分布状況である。(資料はデータリサーチ(ベネッセ駿台)による。データ件数は約46万件でセンター受験者数の8割弱にあたる。)これを見ると世界史Bは毎年高得点寄りにピークがあるのに対し、地理Bはピークを中心に左右対称に近いグラフになっている。年度によりピークの位置にも変動があり、日本史Bは昨年、一昨年に比べてピークは低い方へ移り、しかも目立たない分布状況になった。逆に『倫理・政経』は明らかにピークが高得点方向へ移った。

図1. センター試験平均点推移(ベネッセ駿台 データリサーチ集計)

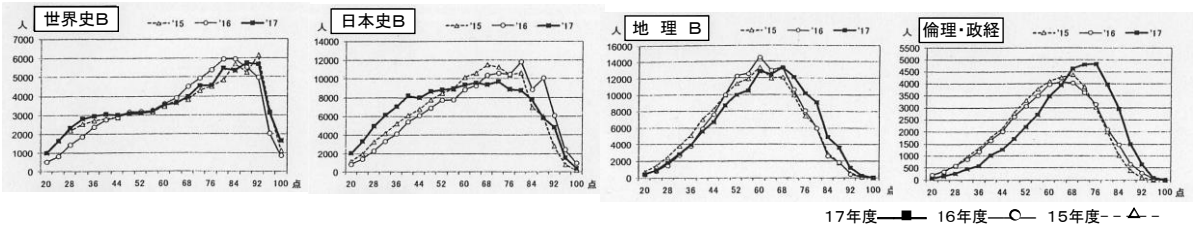


表2. 地歴、公民2科目受験者の科目選択内訳

教科		地 理 歴 史				公 民			
		世界史A	世界史B	日本史A	日本史B	地理A	地理B	現代社会	倫理 政治経済
科 目	世界史A			59人 [0.0%]	51人 [0.0%]	36人 [0.0%]	42人 [0.0%]	207人 [0.1%]	46人 [0.0%]
			世界史B	37人 [0.0%]	6,804人 [4.6%]	29人 [0.0%]	6,828人 [4.7%]	10,982人 [7.5%]	5,081人 [3.5%]
				日本史A		36人 [0.0%]	19人 [0.0%]	475人 [0.3%]	94人 [0.1%]
					日本史B	32人 [0.0%]	3,471人 [2.4%]	26,805人 [18.3%]	7,895人 [5.4%]
平成29年度センター試験における 地歴歴史・公民2科目受験者の科目選択状況 (大学入試センター発表)						地理A		344人 [0.2%]	42人 [0.0%]
							地理B	11,340人 [7.7%]	1,246人 [0.9%]
								現代社会	189人 [0.1%]
									倫理
■組合せは多い順に									政治経済
1. 日本史B+現代社会 [18.3%] 2. 日本史B+政治経済 [11.9%] 3. 日本史B+倫理、政経 [11.7%] 4. 世界史B+倫理、政経 [7.9%] 5. 地理B+現代社会 [7.7%] []内は2科目受験者に対する受験者の構成割合									

得点差が広がりやすい理科

一方、理科受験の場合は、表3に示したAからDのどれかを選択する。国公立文系志望であれば「A」であるが、これは基礎科目2科目が必須だ。表4に示す通り、化学基礎＋生物基礎の組み合わせがA選択者の過半数を占める。次いで生物基礎＋地学基礎の組み合わせで、この2パターンで約9割を占める。国公立理系志望の場合は「D」が標準となるが、看護・医療系では「A」や「B」、「C」のパターンもある。

「D」選択者の科目選択内訳は表5に示した通りで、物理＋化学だけで7割を超える。(いずれもデータは大学入試センター発表資料)

理科は得点差が開きやすい傾向がある。得点のばらつきの指標となる標準偏差はセンター発表データで理科は20点前後(物理23.64点～地学15.77点)であるのに対し、地歴、公民は15点前後である。力のあるなしで差が付きやすい教科と言えるだろう。

特に現役生と浪人生との成績のギャップは大きい。大学入試センターでは現役生と既卒生との比較はしていないので、ベネッセ駿台のデータネットの統計(表6)を引用するが、今年のセンター試験で最も「現浪差」が顕著だったのは「物理＋生物」の組み合わせで30点の差が生じた。昨年は同じ組み合わせで38.6点だったので差は縮まったが、それでも30点である。もっともこの組み合わせは全体の0.6%であるが、「物理＋化学」でも30点近い差が確認できる。現役志向が強まり、第一志望に合格できなくても、そこそこの大学に合格できれば進学する現役生が多い中、敢えて「浪人」する覚悟を決めて難関大学を目指す既卒生と比較するのにそもそも無理はあるが、難関大学を目指すのであれば、力のある既卒生に差を開けられないことが何よりも合格へのカギを握ると言えるだろう。

難関大合格を目指すみなさん。目標をしっかりと見据えて、日々の努力を怠らないようにしましょう。

模試・過去問 みんなの活用術

受験勉強も後半戦だ。明日でセンターまで100日となるが、気持ちを落ち着けて、着実に力を積み上げていこう。半年後に憧れのキャンパスを闊歩している自分を思い浮かべて、気持ちを強くもって精進することだ。

現役生は入試直前まで伸びる。「希望は高く！^{のぞみ} 気持ちは強く！^{ハート}」を胸に誓って乗り切ってもらいたい。

さて、これからはセンター試験や国公立大入試へ向けて、模試を受けたり、過去問を解いたりして、実践力を高めなければいけない。蓄えたエネルギー、力を効率よくアウトプットするためには、模試や過去問の活用が絶対不可欠だ。蛭雪時代の記事などをもとに、これからの過ごし方を考えてみたい。

●模試の活用術 活用目的として最も多かったのが「解答手順・時間配分のコツをつかむ」だった。1年間で受けた模試の回数はマーク模試、記述模試とも各6回以上が最多で、大学別模試の受験回数も2回が最多となっている。入試本番をシミュレートしている様子がうかがえるが、模試の復習も弱点補強には不可欠だ。過半数の人は模試受験の当日、翌日に復習をしている。解答時の余韻が残っているうちの復習がより効果的だ。

表3. センター試験理科の科目選択方法

	理科①	理科②	科目選択方法
科目	物理基礎 化学基礎 生物基礎 地学基礎	物理 化学 生物 地学	A:理科①から2科目 B:理科②から1科目 C:理科①から2科目 & 理科②から1科目 D:理科②から2科目

センター試験理科の科目選択は上記のA～Dの4パターン
基礎科目1科目だけの選択は不可

表4. 理科科目選択方法Aの受験者の科目選択内訳

物理基礎	化学基礎	生物基礎	地学基礎
物理基礎	10,017 人 [7.2%]	2,192 人 [1.6%]	1,166 人 [0.8%]
	化学基礎	80,332 人 [58.0%]	3,379 人 [2.4%]
		生物基礎	41,453 人 [29.9%]

[]内は科目選択方法Aの実
受験者(138,539人)の構成率

表5. 理科科目選択方法Dの受験者の科目選択内訳

物理	化学	生物	地学
物理	139,612 人 [71.4%]	1,177 人 [0.6%]	455 人 [0.2%]
	化学	53,603 人 [27.4%]	254 人 [0.1%]
		生物	370 人 [0.2%]

[]内は科目選択方法Dの実
受験者(195,471人)の構成率

表6. 理科平均点の現浪差

科目組合せ	現一浪 平均点
物理基礎＋化学基礎	-13.1
物理基礎＋生物基礎	-11.0
物理基礎＋地学基礎	-4.8
化学基礎＋生物基礎	-11.3
化学基礎＋地学基礎	-4.6
生物基礎＋地学基礎	-8.5
物理＋化学	-27.7
物理＋生物	-30.4
物理＋地学	-19.2
化学＋生物	-27.4
化学＋地学	-27.2
生物＋地学	-23.1

(ベネッセ駿台・データリサーチ)
基礎科目は100点満点(50点＋50点)での得点差。
発展科目が200点満点であることを考慮すれば、
基礎科目の充実が文系生徒の重要課題である。

「模範解答と照らし合わせて、どの段階で自分が間違えているのかを探し、その部分をまとめたノートを作った。」(東京工業大・工学院)、「模試の解答を見ながらしっかりと理解する。そのとき必ず教科書も手元に置いて、教科書のどこの部分の問題なのかを確認した。」(東京大・文三)、「間違えた問題はもちろん、正答していた問題も解説を読み、どうしてその答えになるのかを逐一確認した。また、解説に該当する教科書、参考書の内容に目印をつけ、常に見直せるようにしていた。」(信州大・人文)など、間違いの個所を把握し、ノートに整理して活用することが得点力のアップには不可欠だ。

「大学別模試は本番同様の形式なので、時間配分や解く順番を考えるうえで役立つ。あらかじめ過去問に触れ、戦略を立ててから大学別模試に臨むのがよいと思う。」(一橋大・社会)、「マーク式模試では、問題を飛ばす際はマークをしっかりと何度も確認するという癖をつけておくことで、本番にマークミスするということを防げる。」(山形大・農)など、入試本番を想定したトレーニングもこれからは必要になってくる。

●過去問の活用術 7割以上の人が9月以降にセンター試験や大学別の過去問(赤本)を解き始めている。自分の志望校が課すセンター試験の科目・配点の比重を考慮し、センター試験と大学別(国公立大個別試験、私立大一般入試)それぞれの過去問を解く時期・量を見極めることが大切だ。

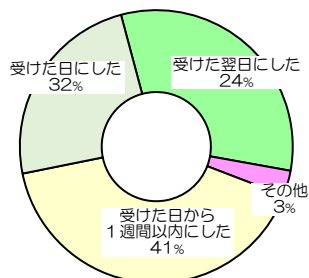
「過去問を何年分解くか」については、各教科とも5年分は解いておくのが最低条件で、できれば10年分はカバーしておきたいところである。

中には、出題傾向の変化を考慮し、最近の問題に絞ったり、効率面を考えて苦手科目に絞って解いたという人もいる。進路資料室や図書館では赤本の貸し出しを行っているので、積極的に活用してもらいたい。昨年

は、「10年分解いたから、それ以前の分を借りたい。」との申し出が多くあり、段ボール箱の中の古い資料を探して貸し出すことが多かった。

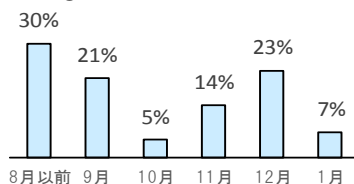
また、センター・大学別の過去問とも出題傾向をつかむことは大切だが、出題傾向や難易度は変わることもあるので、本番を想定し予想問題にも積極的に取り組もう。特に理科、数学Ⅰ、数学Ⅱは2015年から科目編成が変わり過去問が少ないので、予想問題は貴重な教材である。

模試の復習はいつした？

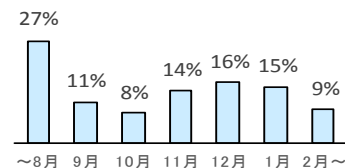


過去問を解き始めた時期

①センター試験



②大学別(赤本)



センター試験過去問は何年分解いた？

	やっていない	1～5年分	6～10年分	11～15年分	16～20年分	21年分以上
国語	3%	26%	33%	19%	11%	8%
地歴	4%	28%	33%	13%	14%	8%
公民	5%	39%	29%	18%	7%	2%
数学	4%	34%	29%	14%	12%	7%
理科	4%	38%	29%	14%	10%	5%
英語	3%	35%	38%	9%	7%	8%

校外イベントの紹介

平成 29 年度UECスクール(主催:電気通信大学) 対象:高校1年生、2年生

第 1 回(10/21)情報リテラシーⅠ(20)、理科学実験Ⅰ(12)、プログラミング学習Ⅰ(20)

第 2 回(11/11)理科学実験Ⅱ(12) … 音響の先端研究の紹介と音波の実験

第 3 回(12/25)情報リテラシーⅡ(20)、プログラミング学習Ⅱ(20)

第 4 回(3/27)情報リテラシーⅢ(20)、プログラミング学習Ⅲ(20) ()内の数は定員

※詳細、申し込みは <http://www.kodai.uec.ac.jp/>

電通大では音響学の研究も行って、技術スタッフとしてNHKなど放送局への就職もあるようだ。
ちょっと意外な感じですね！